

2. 学生スポーツの本質 —バレーボール部を例に—

鳥羽 賢二¹⁾

The essence of college sports — A Case of BSSC volleyball team — Kenji TORIBA

Key words : 文武両道, 三 (知・徳・体) 育, 根源的欲求

1. 高等教育機関の運動部活動とは

スポーツと教育が密接に関わりあう場が学校教育につくられた背景には、わが国のスポーツ環境の整備と、それに伴うスポーツ観の醸成があった。スポーツは、明治期の西欧文化の伝播と時期を同じくして、学校教育を中心に位置づけられた。明治初期に高等教育機関における運動部の活動は、課外における組織的な実践活動として始まった。東京大学には1866年に運動会（現体育会）が結成され、また東京高等師範学校（現筑波大）では、学生の主導によって、1887年に同会が設立された。その活動は、特に「文武両道」を前提とされていた。その意味合いは、学問と武芸の両方に優れていることであり、現代においては、勉強とスポーツの両立をさしている。このように140年有余続いている大学の運動部活動は、学校教育のなかで、特に「文武両道」を教育方針に掲げ、奨励する教育機関は多く、ひとつの学校文化となっている。もちろん、本学の建学理念の第一義にも「…豊かな教養と高度な専門性を有する人材の育成をめざす」と謳ってある。したがって歴史を振り返れば、大学におけるスポーツ活動は「文武両道」が保障され、自主自立の精神によると

ころのものでなくてはならないといえるのだろう。

2009年12月に社団法人全国大学体育連合会からの声明文に、「スポーツを通して心身を鍛え、フェアプレイの精神を養うこと、さらに、これらの諸活動を通じて調和の精神を磨くことなどは生涯にわたって教養を培う上での重要な課題」であると述べている。加えて、高等教育機関へ課外活動に関する施設と指導の整備を唱え、「大学生が人間（ひと）として成長するために—正課外教育の重要性と再認識—」（日本私立大学連盟報告、平成19年）などを示し、教育機関側の適切な環境作りと指導実践を要請している。このことは、学生のスポーツ活動が教育とスポーツを繋ぐ有機体として、活動を通して得られる教育的効果を有していることであると同時に、それをしっかりと再構築すべきだといった告知と捉えることが出来る。それらの教育的効果、すなわち「知育」「徳育」「体育」は、単に競技スポーツの場としてトップアスリートを育成するだけでなく、多くの現場教師や活動経験者の信望するところとなっている。高等教育での知識習得「知育」、一社会人としての高い倫理観、モラルやマナーの養成「徳育」、身体能力のアップ「体育」が、大学スポーツ活

1) 競技スポーツ学科

動には求められることになる。さらに、その延長線上には、大学スポーツ界は、日本の国際競技力向上をも担う役割を果たしてきている。プロや社会人スポーツ選手の養成機関として位置づけられている。

ところが、教育の一環や国際競技力向上として大学スポーツ活動が採用されているにも関わらず、学生スポーツ選手に端を発した不祥事が多発している。関東や関西の体育会学生の麻薬所持や飲酒運転、さらには婦女暴行事件などおびただしい。大学卒業後の社会人選手に到っても、ネガティブな話題に登場することが数多い。学生スポーツ選手が問題事例として取り扱われることは、無念千万に思う。「文武両道」の模範学生、ロールモデルにならない学生スポーツ選手に、何故、これらの問題が引き起こっているのか。少子化も影響し、いよいよ大学の全入時代へ突入した。一つの要因として、大学間の学生獲得競争の手段にスポーツがあることが挙げられる。大学名の広告活動の一端をスポーツ活動へ担わせられるケースがある。スポーツの公共性を借りて、大学名を世間にピーアールするのである。競技力に秀でた学生は、形式的な入試をパスし、在学四年間は競技のみに没頭させる環境が現存していると聞く。そして、学内の同じスポーツクラブ間でさえ、スポーツ感についての交流すらない状況がある。勝利ばかりを追い求めそれを偏重するばかりに、学生は閉鎖的な環境に置かれてしまい、知識、倫理観の習得や他とのコミュニケーションが遮断され、社会性が身につかなくなっているのだ。そもそもの学生スポーツの前提である「文武両道」との齟齬が明らかとなっている。前述したとおり、学生スポーツの置かれている環境は、「知育」「徳育」「体育」が三拍子そろってバランス良く教育を享受される場にある。競技力のみアップさせようとする大学で、社会性が培われない運動部員が、多くの不祥事を起こしているというのは、誇張し過ぎであろうか。本学にこうした

事情が無いことが、願わしい。

2. 競技スポーツ

英国で誕生した近代スポーツは、大英帝国が植民地を傘下に治めることで世界各地へ広まった。その源である英国のパブリックスクールでは、スポーツは身体を鍛えるだけでなく、人格を陶冶するための教育手段とされていた。日本にも古来より存在していた武道があり、全人的な教育機能との親和性があった。

図1で示したように、人間は、見えないものと、見えるものの3つの要素から成り立っているといえる。一つ目は「身体」で、人間それぞれが固有している肉体のことである。二つ目は、「頭脳」や知識を元とする思考能力を指す。三つ目は「心」で、これは精神力、意志やモチベーションと言い換えることもできる。競技性スポーツでは、これらの脳（ナレッジ）、心（マインド）、身体（フィジカル）が三位一体となり、バランスよく統合しながら、高水準で活動していくことが理想となる。スポーツで勝利するための戦術は、主に「脳」の部分で練られていくが、“知”の偏重ということになると、それこそ机上の空論で戦術が使えず仕舞いで、敗戦してしまう。また、“精神”ばかりが偏重すると「カルト的」になりかねない。長期間にわたって滝に打たれ、根性さえ鍛えあげればスポーツで勝てる、ということはある得ない。「身体」が偏重

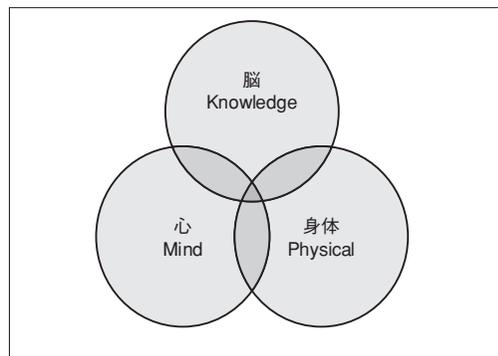


図1 人間の3要素

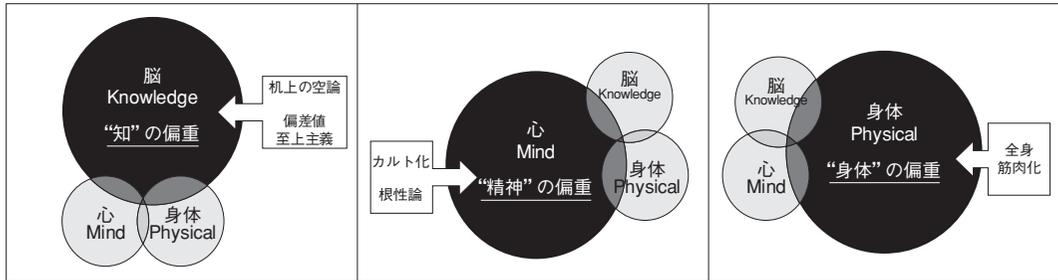


図2 それぞれの偏重

すれば、あいつは脳まで筋肉になっているぞ、などと揶揄されてしまいかねない。ドーピングで筋力を増強し、ルールを犯して試合に勝利すれば良いということではない(図2)。しかしながら実際には、三つの何れかに偏ってしまっていることが多いのが現実といえる。理論やパフォーマンスばかりを強調する人、気合いのみで決着をつけたがる人といった具合である。

ところが、競技スポーツに携わる者は、そうはいかない。身体、頭脳と心がバランス良く重なり合い、独自の機能を果たしているときこそ、真の競技スポーツを実践しているアスリートであるといえる。すなわちこのことは、スポーツが「全人教育」としてとりいれられた経緯の証でもある。また、競技スポーツの眼目は、人間形成にあるといっても過言ではない。本学のようにスポーツを冠した大学が、設立された所以にもなっている。今後、本学のスポーツ強化は、身体、脳、心の何れかが主導的役割を果たせるものではないことを肝に銘じ、それぞれが補完しあいながら、バランス良く機能させながら進めていくことが重要であることを認識して行っていくべきであろう。

3. コーチングの役割

大自然の中にある本学は、都心の中にある数多の大学とは全く違った大きなメリットがある。真新しく充実したスポーツ施設を兼ね備えてもおり、学生主導の課外活動にとって、健やかな心と身体を併せ持つための、大

変恵まれた環境にあるといえる。大いに意欲をかきたて、大きな目標を持ち、是非とも真のスポーツ価値のフロンティアへ挑戦して欲しい。そこには、仲間との出会いや絆を形成するまたとない貴重な時間の経過があり、後の人生をも左右する、大きな財産を形成出来る。そして、目標達成のため喧々諤々の議論をとおし、真剣なコミュニケーションから獲得できる一生涯の友と出会うチャンスもある。競技スポーツを実践する学生の全人的な成長活動は、われわれ全教職員が精一杯手を差し伸べて、支援していかなくてはならないと心得ている。

競技性を高めるには、優秀な指導者(コーチ)が必要である。コーチ(Coach)という言葉の語源を辿れば“4輪馬車”であり、目的地へ安全で早く楽に届ける役目を果たすことで、現在でもイギリスでは長距離バスのことをコーチと呼んでいる。そのような意味を転じて、スポーツの指導者をコーチと呼ぶようになった。専攻しているバレーボール界のコーチングスタイルは、その意味からいえば隔たりを感じる。在学生にアンケートを取ったところ、中高生時代に9割の学生が鉄拳制裁を受けながら指導を受けた経験があるとのことだ。先日も関西大学リーグで、劣勢になったチームコーチがタイムアウトを要求し「お前ら、何をやっているんだ。駄目だ!」と選手へ大声で怒鳴っていたシーンを目の当たりにした。選手たち自身がうまくいっていないことは重々痛感しているところに、その上コーチから試合中に頭ごなしに怒鳴られ、結

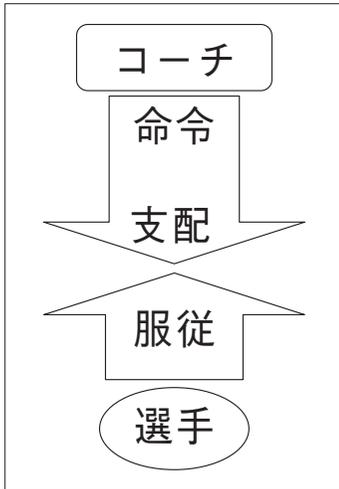


図3 従来のコーチと選手の関係

局そのチームはあと一步のところまで敗戦してしまっただけだ。このとき「駄目だ!」と怒るのではなくて、どうしたら対戦チームとの差を縮められるのかを、もう少し具体的な戦術を選手へ落とし込んで、モチベーションを上げてやっていたら、結果が多少違ってくるものだと想像するのは間違いであろうか。経験上、怒った方が良いケースもある。それは、出来ることをやらなかったケースで、集中力を保てず気を抜いてプレーしているときは叱咤することの効果がある。したがって怒ることの全てを否定するのではないが、怒ったときのプラスの効果は非常に少ないと心得るべきであるといえる。ましてや、怒りに駆られて手を上げるなどはもっての外であり、そのような指導法は現在のスポーツ界からは無くなるべきで、少なくともバレーボール界のコーチには、元より意味するコーチングスタイルをとっていただきたい(図3)。

では、どのようにしてコーチと選手は、指導する者とそれを享受する者の有効な関係性を構築するのか。それは、お互いの希望や目標あるいは、それを達成するための具体的な方法をしっかり互いにコミットメント(相互理解)することがポイントとなる。国内の大学では、講義評価を学生側から実施することは、現在通例となっている。教育を受ける側

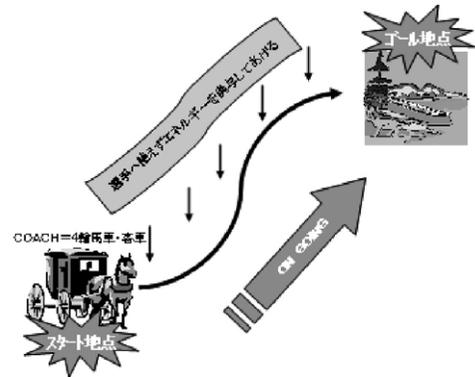


図4 望ましいコーチングスタイル

からの視点も入れながら、顧客(学生)満足をはかろうとしている。スポーツの現場も同様で、決して指導者のエゴによる一方通行のコーチングを実践してはならない。常にコーチングは双方向のインタラクティブなコミュニケーションの上で実践すべきものだ。例えば、学生に個別な面談を実施し、過去(自己理解)と将来(目標設定)の人生設計を聞き、そのためにやらなくてはならない実践方法を明確にした上で、それを支援していくといった立場をとるのが、望ましいコーチングスタイルであろう(図4)。目標設定において、プロや社会人選手として卒業後も現役生活を継続していきたい学生や、また4年間で現役生活を終了し、スポーツで得た経験を糧にして、その後は一社会人として生活を送る学生もいる。いずれにしても、引退後のセカンドキャリアとして、彼らがその後の生活が困難にならないように、サポートや教育を施してあげることが、スポーツを薦める指導者の使命でもある。

フランス人の著名なサッカーコーチであるロジェ・ルメールは、「我々は学ぶことをやめた時に、教えることをやめなければならない」と指導者としての金言を残している。スポーツ指導者は、自らがスポーツ文化を理解し、プレイヤーの立場に立ってサポートを実践していくものであるとしている。指導するターゲットは人間(ひと)であり、変化しながら成長していく。したがって、相手の成長

にマッチングさせながらコーチングは変化していかななくてはならない。そこに指導者としての学びは必須になるということだ。これまでの指導は、個々人の持つスポーツの目的を合理的に達成するための方法として、技術や戦術に関する指導が中心となってきた。しかしながら近年は、スポーツの行い方や取り組み方、とりわけスポーツに意義と価値を与えるスポーツ観や、競技規則だけではなく、スポーツマンシップとフェアプレイに代表されるマナー・エチケットなどの道徳的規範を指導することも、重要なコーチングの使命にもなっている。それが、将来にわたり豊かなスポーツ文化の享受能力を育成していくこととなる。

最近になり、コーチングスキルが注目を集め、ビジネス界でもその基本的概念が受け入れられブームになっている。それは、相手の自発的な行動を引き出すためのコミュニケーションスキルが有効だとされているからである。大学スポーツの場では、コーチが目指すべき行動は、学生自身が自主的、積極的な行動に取り組むための環境作りといえる。学生が自律・自立し、自ら進んで取り組むようにするためには、コーチとしてどのようなことに心がける必要があるのかを自問自答しながら、指導者はいつも努力を要することが肝心である。

4. BSSCバレーボール部の実態と課題

本校に赴任し丸3年が経過する。赴任当初バレーボール部員へ、チームスポーツではお決まりの「One for all, All for one」の実践について熱く語り、執拗に説いた。しかしながら、暫くたってもその意味合いを部員たちはなかなか理解してくれなかったように記憶している。何に原因があるのか、学生たちの生活習慣を聞いてみれば、反響がなかった理由が理解できた。休日の午前中練習で朝食を抜いて参加していたり、あるいは夜間のアルバイトで睡眠が十分とれないまま練習へ参加し

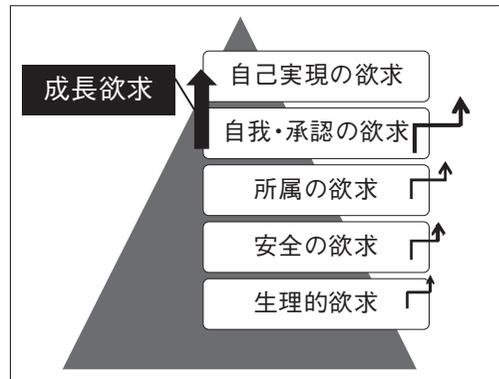


図5 A.Hマズローの人間の根源的5段階欲求説

ている学生が多いことに気がついた。振り返れば、マズローの人間の根源的欲求説(図5)に当てはめると、まさしく最下位の生理的な欲求さえ満足に満たされていないのである。マズローによれば、下段から欲求が満たされると段階的な欲求が生まれるとのことであるが、チームのためにがんばれ!と「所属の欲求」へのアプローチを施したところで、「生理的欲求」が満たされていない部員へ、その段階的ステップを鑑みれば、声が届かないのは至極当然のことであったのである。また、下位欲求が満たされないまま次の上位段階へ進むと、「欠乏欲求」という問題行動を引き起こす可能性がでてくるともマズローは説いている。他者から注目を引くために、周りのチームメイトへ危害を加えたりすることも起こりうるとのことである。幸いにしてそういったケースは免れたが、このような事情は、実は学生スポーツ界には非常に多い。インカレを制するチームでさえも、アスリートとしての食事をきちっと摂取させることに苦労すると聞く。強固なチームワーク(所属欲求)を創ろうとするならば、健全な欲求ステップが踏めるように、先ずもって、根底の欲求が満たされているような私生活を充実させなくてはならない。それが、強化の第一歩となる。

最近では、対戦相手と実力が拮抗しているチームに勝利するために、戦術が機能するよ

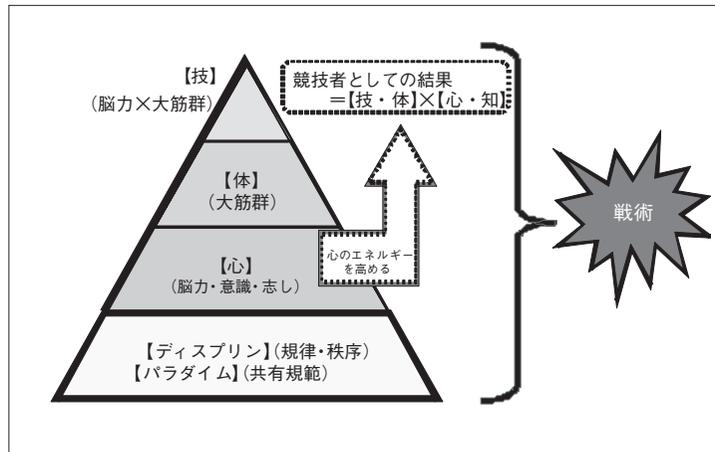


図6 戦術を実践するための必要な能力

うになってきた。戦術を語るうえでの大前提として、チーム内の秩序感、モラル、ディシプリン（規律）、パラダイム（理論的枠組）などは、コーチングアプローチに必要不可欠である。「右向け、右！」と言ったときに、左を向いている者がいれば、戦術は機能しない。そのため、日常的に部員同士やあるいは、コーチと学生間でしっかりとコミュニケーションがなされているか、時間を守っているか…、といったことが実は重要となってくる。実践で戦術をうまく機能させるためには、練習の場でも、ミスあるいはうまくいった場合、できるだけプレーの直後に、選手間でそれがフィードバックできているか、すなわちゲームライクに緊張した練習雰囲気の中で反復練習ができているかがキーポイントとなる。試合中にいきなり、「こうしろ、ああしろ！」と言っても、選手は機械のように動けるわけではない。コーチも学生も、普段の練習にどれだけエネルギーを費やしているかが、実戦で活きることになる。

簡単に至極当然のことではあるが、選手全員が集合時間の10分前には集合できるようになってきた。このような秩序感あるアクショ

ンの下、24対24などゲームの大事な局面で、戦術が機能するようになったという実感がある。日常から選手全員が時間通りに練習に入ることが習慣化し、さらにスタッフはそれ以前にマイクロ（2～3時間）の練習計画をしっかりと準備して臨むということが当たり前になった。このようなことがルーティンとして毎日繰り返され練習を実践していけば、何れは必ず勝利をもぎ取れるチームへ成長出来ると確信している。

以上のように、時代の変化とともにコーチング方法は大きく変わってきている。しかし何よりも重要な点は、スポーツ活動は学生自身が主体性を持ち、将来像をイメージして、そうなるための課題をクリアできる実践力を身につける場であることを自覚し取り組むことである。なぜなら、スポーツ活動は「人生の疑似体験」のまたとない実践の場であるからだ。

参考文献

横山勝彦 (2009). 「ライフスタイル教育—スポーツを通して伝える生きる力」 昭和堂 pp.17-19, 101-104.